

香川県におけるカワバタモロコの採集記録

安芸昌彦

〒760-0068 香川県高松市松島町1-18-54 香川県立高松商業高等学校

大高裕幸

〒761-0113 香川県高松市屋島西町2469 高松市立屋島西小学校

A Record of *Hemigrammocyppris rasborella* collected in Kagawa Prefecture

Masahiko Aki, Takamatsu Commercial High School, Takamatsu, Kagawa 760-0068, Japan

Hiroyuki Otaka, Yashima-Nishi elementary school, Takamatsu, Kagawa 761-0113, Japan

はじめに

カワバタモロコ *Hemigrammocyppris rasborella* Fowler はコイ科の日本固有種で、現在絶滅が危惧されている淡水魚である。雄の婚姻色が鮮やかな黄金色をあらわすことで知られ、平野部の浅い湖沼・ため池・小川などにすみ、小数で群れをつくって表層付近を遊泳する習性をもつ。本州の中部地方以西、四国の瀬戸内海側および九州北西部に分布するとされている(前畑, 1989; 明仁ほか, 1993)。

香川県内で最初にカワバタモロコが報告されているのは1944年の木田郡前田村水路, 現在の高松市前田西町・前田東町周辺である。ここは新川水系で採集個体数は不明である(岡田・中村, 1946)。1972年には鴨部川井戸川橋で1個体(川田・須永・植松, 1973), 1977年と1978年には春日川中流域でカワバタモロコが採集されているが採集場所や個体数はいずれも不明である(植松・須永・川田, 1979)。1985年には金倉川支流深田川黒見神社前で4個体が採集されている(大高, 1985)。これらの報告のうち、春日川を除けば同じ河川でカワバタモロコが再確認された事例はなく、県内のカワバタモロコが自然分

布であるかどうかについては疑問があった。しかし、今回、土器川水系においてカワバタモロコの繁殖場所が発見されたことから、カワバタモロコが自然分布である可能性が高くなってきた。この報告の作成にあたりカワバタモロコの採集情報を提供して下さった宇多津町立宇多津中学校の葉王智教諭, 現地調査に協力して下さった香川県立高松西高等学校の福家英樹教諭ならびに原稿作成の過程で丁寧なご指導をいただいた香川大学農学部の渡辺直教授に深く感

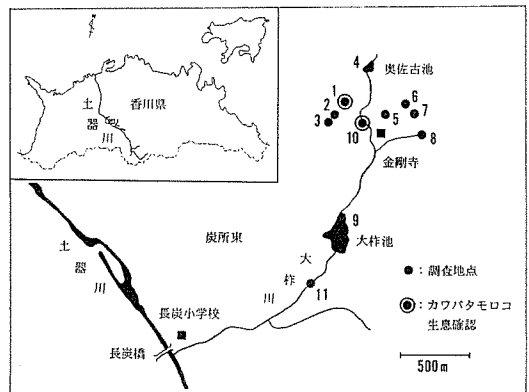


図1. 大杵川流域の魚類調査地点。

謝の意を表する。

採集場所および方法

今回、カワバタモロコの生息が新たに確認された場所は、土器川支流大柞川(満濃町)1地点とその上流部のため池(真勉池)1地点の計2地点で、葉王氏によって1997年8月2日に発見された(図1)。

葉王氏から報告をうけた著者らは同年9月28日と10月4日に現地調査を行った。調査には玉網(目合い8mm)とモンドリ(30×30×60cm, 目合い5mm)を使用した。また、モンドリ用の餌には市販のマッシュポテトにサナギ粉を混ぜたものを使用した。今回の調査対象として選択した11地点についての概況は以下のとおりである。

地点 1. 真勉池

長径が約10mのだ円形で民家に隣接した場所にある。池の堤は護岸されていない。水深20~30cm, 底質は砂泥で倒木が多く存在している。水は清澄で底の状態まではっきりと確認できる(図2)。

地点 2. 真進下池

水田に囲まれた長径が約12mのだ円形のため池である。池の堤は護岸されていない。水深は約2m, 底質は砂泥である。

地点 3. 真進中池

真進下池の上流部に位置し、下池とは水路でつながっている。大きさは10×12mほどで池の堤は護岸されていない。水深は約2m, 底質は砂泥である。

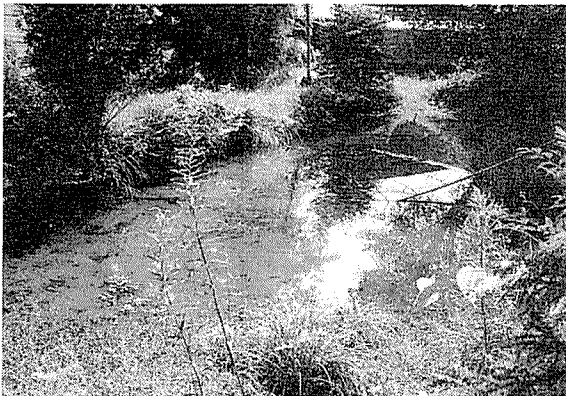


図2. 真勉池.

地点 4. 奥佐古池

大柞川の上流部にあるため池で、数年に一度農閑期に池の水を抜いて手入れをしている。池の堤は護岸されていない。

地点 5. 華空蔵池

人家に隣接するため池で、大きさは7×10mほどである。藻類が多いため透明度が低い。池の堤の一部が護岸されている。

地点 6. 前池

道路沿いにある山地池で、大きさは10×15mである。数年前に堤防の改修工事が行われている。

地点 7. 小原池

長径が約20mのだ円形のため池である。形状はすり鉢状で池の堤は護岸されていない。底質は土砂で水が濁っている。

地点 8. 砂古谷池

池の堤はコンクリートブロックで護岸されている。水色は暗緑色で濁りが少ない。池中に水草はみられない。

地点 9. 大柞池

炭所東地区で最大のため池である。池の堤はコンクリートブロックで護岸されている。大柞川が流入する付近には泥が堆積している。底質は砂泥, 水色は暗緑色でやや濁りがある。

地点10. 金剛寺横(大柞川)

3面コンクリート張りの水路で底には砂泥が堆積している。生活排水が直接流入しているため合成洗剤の泡が水面に浮いている。水深は深い所で約80cmである(図3)。



図3. 金剛寺横(大柞川).

表 1. 大柞川流域の魚類調査結果 (○は出現を示す)。

魚種名	学名	調査地点											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
カワバタモロコ	<i>Hemigrammocyppris rasborella</i> Fowler	○											○
ギンブナ	<i>Carassius auratus langsdorfii</i> Cuvier et Valenciennes				○	○		○		○			
カワムツB型	<i>Zacco temminckii</i> (Temminck et Schlegel)												○
タモロコ	<i>Gnathopogon elongatus</i> (Temminck et Schlegel)				○								○
モツゴ	<i>Pseudorasbora parva</i> (Temminck et Schlegel)		○					○		○			
カワヨシノボリ	<i>Rhinogobius flumineus</i> (Mizuno)								○	○	○	○	○
ドンコ	<i>Odontobutis obscura obscura</i> (Temminck et Schlegel)											○	○
ドジョウ	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i> (Cantor)							○					
ブルーギル	<i>Lepomis macrochirus</i> Rafinesque										○	○	

地点11. 大柞池下流300m付近(大柞川)

兩岸ともコンクリート護岸で川幅は約4m。岸から50cmの幅で川底にコンクリートが敷かれている。土砂が堆積し雑草が繁茂しているため水幅は1m程度、水深は約15cmである。

結果および考察

表1は現地調査を行った11地点の魚類採集結果を示している。薬王氏の情報どおり真勉池と金剛寺横の大柞川の2地点でカワバタモロコを確認することができた。

真勉池(地点1)では、カワバタモロコのみ18個体がモンドリに入った。目視での確認も行ったがカワバタモロコ以外は発見できなかった。金剛寺横の大柞川(地点10)では、カワバタモロコは中層を40~50個体の群れをつくって泳いで

いた。ここではカワバタモロコを18個体玉網で採集した。その他にはドンコ *Odontobutis obscura obscura*, カワヨシノボリ *Rhinogobius flumineus* を玉網で採集した。

図4は1997年の現地調査で採集した真勉池と金剛寺横の大柞川の個体の体長と体高の測定結果を示している。真勉池の個体の体長は25.5~38.3mm, 大柞川の個体の体長は36.6~64.4mmである。カワバタモロコは普通1年で体長25~35mmに成長し成熟する(前畑, 1989)。このことから考えると大柞川の個体は非常に大きい。

図5は1999年10月11日の再調査で採集した真勉池の個体の体長と体高の測定結果を示している。この調査では金剛寺横の大柞川でカワバタモロコを再確認することはできなかった。真勉池の個体の体長範囲は1997年の調査時と大きな違いはない。ただ、体長20mm未満の当歳魚が新たに採集されている。

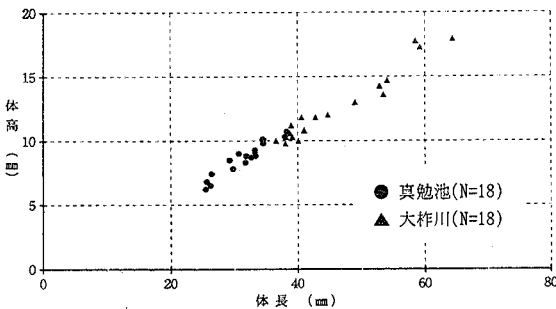


図 4. カワバタモロコの体長と体高。(1997.9.28採集)

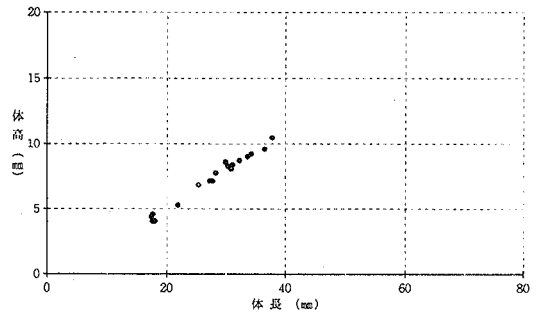


図 5. カワバタモロコの体長と体高。(1999.10.11採集 N=18)

間も使われておらず、今後も使用する予定はないとのことである。また、1994年夏の大渇水時にも干上がらなかったことから、ここはカワバタモロコにとって安定した繁殖場所となっていると考えられる。

環境庁編の1991年版レッドデータブックでは、生息地東限である静岡県産のカワバタモロコ個体群のみが保護に留意すべき地域個体群として掲載された。しかし、1999年に環境庁から発表された汽水・淡水魚類のレッドリストでは全国のカワバタモロコが絶滅危惧 I B類(近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種)に指定された。

現在、香川県のため池に生息するニッポンバラタナゴ *Rhodeus ocellatus kurumeus* などの在来魚は、オオクチバス *Micropterus salmoides* やブルーギル *Lepomis macrochirus* などの外来魚の移入・分布拡大に伴ってその生息場所や個体数の激減が危惧されている。今回報告したカワバタモロコの生息場所周辺でもブルーギルが確認されており、ニッポンバラタナゴと同じ問題がカ

ワバタモロコでも起こる可能性が高いと考えられる。

文 献

- 明仁・岩田明久・坂本勝一・池田祐二. 1993. コイ科. 中坊徹次編. 日本産魚類の検索：全種の同定. 東海大学出版会, 東京：212-220.
- 川田英則・須永哲雄・植松辰美. 1973. 香川県の淡水魚 4. 鴨部川・春日川. 香川大学教育学部研究報告 II (221)：1-12.
- 前畑政善. 1989. コイ科. 川那部浩哉・水野信彦編. 日本の淡水魚. 山と溪谷社, 東京：256-257.
- 岡田彌一郎・中村守純. 1946. 四国及淡路島に於ける淡水魚とその分布. 資源科学研究所短報(7)：1-11.
- 大高裕幸. 1985. 国営讃岐丘陵公園の淡水魚類. 国営讃岐丘陵公園動植物現状調査報告書(香川動植物の会)：21-26.
- 植松辰美・須永哲雄・川田英則. 1979. 香川県の淡水魚. 動物と自然 9 (1)：11-17